

日本の遺跡情報を国際連携する：ARIADNEとSEADDA

高田 祐一[†]

[†]奈良文化財研究所

キーワード：データ連携、国際連携、プラットフォーム

International Collaboration for Japanese Archaeological Site Information: ARIADNE and SEADDA

Yuichi Takata[†]

[†]Nara National Research Institute for Cultural Properties

Keywords: data linkage, international cooperation, data platforms

はじめに

日本には膨大な埋蔵文化財情報・考古学情報が蓄積されている。これを第三者からもさらに評価されるようになるには、世界から簡単にアクセスできる環境を提供することで認知・評価につながる。デジタル時代においては、グローバルなプラットフォームでデータを流通させていくことが必須となる。本稿では、国際プロジェクトである ARIADNE と SEADDA について、これまでの経過を報告する

ARIADNE

1 ARIADNEへの参画

2017年2月、イギリスのヨーク大学考古学情報サービス（Archaeology Data Service、以下、ADS）にて、考古学情報の国際発信に関するセミナーが開催された。セミナーでは、考古学情報を国際的に共有し連携するための具体的な方法について議論された。意見交換において、ADS の Julian Richards 教授から ARIADNE を介した考古学情報の日欧でのデータ連携が提案され、奈良文化財研究所（以下、奈文研）の ARIADNE 参画に繋がった。

ARIADNE^[1] は、多国間での考古学情報を統合し、相互連携によって多くの人

[1] <https://ariadne-infrastructure.eu/>

が情報にアクセスしやすくするシステムの構築、コミュニティの組成に取り組んでいるEUの事業である。第一期は、2013年から2017年に実施された。第二期計画（2019年1月から2022年12月がプロジェクト期間）であるARIADNEplusでは、EU23ヵ国41の機関に加え、日本（奈文研）・アメリカ・アルゼンチン・イスラエルの4ヵ国からも参画している（図1）。ARIADNEは、入手しにくい文化財報告書、画像、地図、データベース、その他の種類の考古学的情報について、国境を超えてオンラインでアクセス可能な考古学リポジトリの構築を実現した。現在、346万のデータセットがカタログ化されている（2023年1月16日時点）。ARIADNEplusは、EUによる研究及び革新的開発を促進するための欧州研究・イノベーション枠組み計画であるHorizon 2020のプロジェクトである。

2022年12月15日、第二期計画の最後となる総会がフィレンツェで開催された。今後のさらなるデータ拡充やFAIR原則でのベストプラクティスの共有などの取り組みを継続できるよう、2023年にARIADNE RI AISBLとしてベルギーに法人を設立することが議論された。



図1 ARIADNE Plus第1回会議（2019年2月、フィレンツェ）

2 ARIADNEへデータ連携

2.1 ARIADNE Portalへのデータ連携概要

2022年2月、ARIADNE Portalに日本の遺跡データを連携した。遺跡・文化財は「時間」「空間」「モノ」で検索することが可能である。遺跡情報を相互検索の枠組みに登録することで、「時間」「空間」「モノ」を検索キーとして、世界の遺跡・文化財を検索できる。ヨーロッパから日本の遺跡を統合検索することが可能となった。日本には膨大な調査蓄積があるが、情報アクセスにハードルがあるため、海外からは利活用しにくい状況であった。ARIADNE plusへの参画により簡

単に情報検索できるようになり、情報アクセスの利便性が向上した。無償で使用できるため、市民も簡単にアクセスでき、研究者にとっては学術研究で利活用できる。

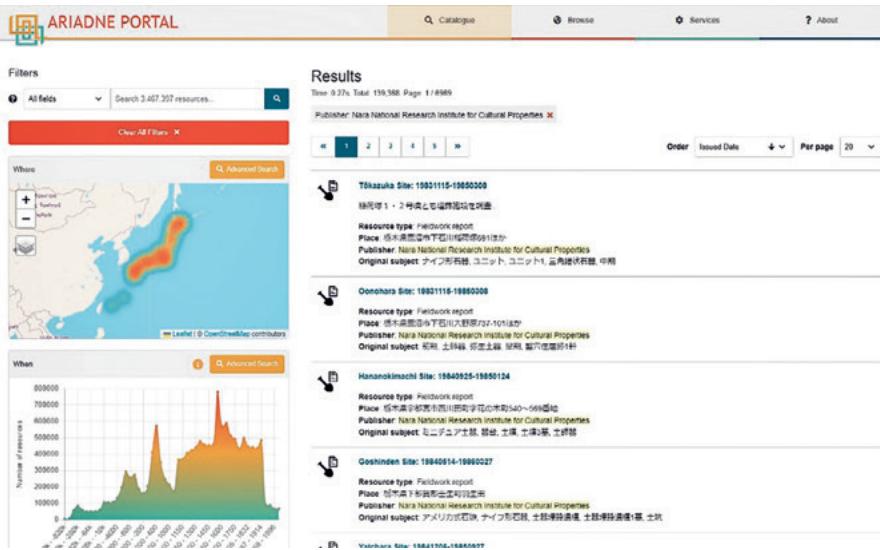


図2 ARIADNE Portalでの日本データ表示状況（14万件の遺跡データ）

ARIADNE Portal

URL : <https://portal.riadne-infrastructure.eu/>

連携データ件数 : 139368 件

連携データの種類 : 日本の遺跡データ（遺跡抄録）

連携データの対象 : 日本全国のデータ、発行機関約1500

連携データの内容 : 遺跡名、位置情報、時代、出土遺物・遺構、報告機関、報告書書誌へのリンク（全国遺跡報告総覧へのリンク URL）

データの英語化状況

遺跡名 : ルールにより自動変換したもの

文化財用語 : 遺跡総覧に対訳があるものは英語で、ないものは日本語のまま

時代 : 新たに英語化

2.2 日英対訳

言語の壁の問題を解決するために、日英対訳などソースが必要となる。そのため、奈文研では文化財関係用語ソースが構築しており、今回の連携にも

活用された。具体的に言うと、当プロジェクトでは、Getty AAT^[2]へのマッピング作業を行った。

SEADDA

SEADDA (Saving European Archaeology from the Digital Dark Age)^[3] は、考古学データのアーカイブ化、再利用、オープンアクセス化などを目指す枠組みであり、COST (European Cooperation in Science and Technology) の枠組みの一つである。SEADDA は 2019 年 3 月から 2023 年 3 月がプロジェクト期間である。SEADDA には EU 各国に加え、International Partner として 4 カ国が参画し、日本（奈文研）もその一つである。

その一環として、2021 年の Internet Archaeology の 58 号では、各国の考古学デジタルアーカイブに関する状況が報告された。これを読んでいただければ、考古学の歴史や、国家との関係（中央集権 / 地方分権）、調査の主体（公共団体 / 民間主導）などの差によってアーカイブのあり方にも差があることを把握できる。

Digital Archiving in Archaeology: The State of the Art

<https://intarch.ac.uk/journal/issue58/>

おわりに

他国や他機関とデータ連携していくには、データ品質の向上と一定の標準化は不可欠である。国内データを取りまとめて、別プラットフォームに繋いでいく組織も必要である。世界的な流れにコミットしていくことで、ガラパゴス化を抑止し、海外からも使ってもらえる調査成果として位置づけていくことが可能となる。

[2] Getty Art & Architecture Thesaurus

米国のゲッティ研究所（Getty Research Institute）が運営する文化に関する用語のシソーラス。

[3] <https://www.seadda.eu/>